



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	<文学青年>の誕生：評伝・中西梅花(中・続)
Author(s)	大井田, 義彰
Citation	東京学芸大学紀要. 第2部門, 人文科学, 55: 223-229
Issue Date	2004-02-27
URL	http://hdl.handle.net/2309/2690
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

文学青年の誕生

評伝・中西梅花(中・続)*

大井田義彰

(国語国文学)

(前号より続く)

ところで、これまで梅花の前期の小説三編を紹介し、その特徴をごく大雑把に眺めてきたが、ここらでそろそろそれらの背後に秘められている彼の基本的なものの考え方について、述べてみたいと思う。「国事探偵 古の手柏」の作者として出発した梅花は、一方でその趣向癖を「機姫物語」にまで発展させ、またその一方で早くから垣間見せていたどこか投げやりな面を「櫛もみじ」で明瞭に露呈させてしまっていたわけだが、続く「今八唯だ」で図らずも、それらの小説の根底に潜む彼の思想とでも呼ぶべき世への対し方を提示していたからだ。

といっても、この作品は四百字詰め原稿用紙に換算すると、わずか十枚にも満たないほどの短いものだから、とても十全というわけにはいかないのだが、その辺りのことをあれこれ論じる前に、まずはこれまでどおり粗筋を示してみたい。

「今八唯だ」の主人公は楓江と号する三十五、六歳の狂言作者。彼は「丈高く」「容貌尋常に秀で」「ているつえ」「当世の李笠シルレルとまでに崇められるほど才気に溢れた人物のだが、なぜか妻子がなく、「随分沢山に入る潤筆料も自分の口を糊するだけを除けて其の他八悉皆之を慈善の学校病院へ喜捨して」しまい、「心を枯木死灰にして浮世に女を見限ざりお釈迦様のやうに今日此頃を

暮らす」という極めてストイックな生活を営んでいる。「浮世に女を見限ざり」というところは明らかに前述した失恋事件の影響だろうが、では、いったいなぜ彼は「心を枯木死灰」にせねばならなかったのか。

彼すなわち楓江は下総の国真間に生まれた。そして幼年期に上京し、学問を修めたのち政界に乗り出そうと企てるのだが、その矢先に重い病にかかり、時勢に取り残されてしまった。仕方なく政界入りを断念した彼は「暫らくハノンキに」と旅に出、その間「次第く」に風流と云ふことを山水に教えられ、いつしか文学に親炙するようになった。そんなある日、彼は京都の旅宿で「女持の懷中」を拾い、それが縁で「或豪家の隠居」の知遇を得、「数奇の道とて発句の話より次第に花を咲かせて思わず識らず長逗留」を続けるうちに、いつしか隠居の孫娘と恋仲になってしまう。旅の途上の名もない若者と、富豪の娘で「今の世の小野小町」と呼ばれるほど美人の彼女とではむろん釣り合うべくもないのだが、しかし楓江のみならずその娘まで相手を思っただけで、隠居も娘の両親もやむなく二人の仲を認めて添わせてやることにする。が、何と婚禮の日、しかも「三々九度の盃最中」に突如大地震が起こり、大混乱の中、楓江は彼女を見失ってしまう。

時は移り、それから一、二年後、「或る山中の庵室」を道に迷った旅の尼僧が一夜の宿を求めて訪ねる。彼女は「顔八只だ鼻目口耳の四つの穴の通りつゝあ

るのみ頭に毛髪と云ふもの一筋もなく左の手折れ右の足短かく「云々とまさに「異形」の風体をしているのだが、たまたま主人が里に出掛けていて不在であったため、代わりに応対に出た下男が常のこととて宿泊許可を与える、彼女は「有難がりて脚絆ほどきて」主人の仏壇に向かつて回向を手向ける。と、「位牌の傍に怪しき片袖」が供えられていて、ふとそれを目にした彼女はその瞬間にすべてを悟り、涙を流しつつ一筆認め、その場で喉笛を突き切り自害してしまう。何を隠そうその尼僧こそ先の大地震で変わりはてた楓江の結婚相手であり、また、この庵の主人とは、彼女と別れた悲しみのあまりに世を捨てた楓江その人であったのだ。

里から帰って事の真相を知った彼は驚き嘆き、やがて「色即是空の悟りを開きて再び女を浮世に娶らず山林是れまことに遁世の処にあらず」と俗世に戻り、最初に示した狂言作者になっていく。以上がこの小説のあらましで、題名の「今八唯だ」とはむろん楓江の末尾の心境を指した言葉だろう。探し求めていた最愛の女性が、変わりはててしまったおのれの醜さを恥じて再会直前に自害する。それを知った男の心情である。「今八唯だ」しがない狂言作者としてこの浮世を承らえるばかり。梅花はこの短編でそのような男を描き出したのだ。

「山中の庵室」での偶然の出会いといえは、誰しも前年(一八八九年)四月に「新著百種」(吉岡書店)の第一号として刊行され、好評を博した尾崎紅葉の『一人比丘尼色懺悔』を思い浮かべるのではないかと思うが、後段は明らかにその模倣だろう。「檀もみじ」の場合ほど露骨ではないものの、露伴について今度には紅葉というわけだ。

ただ、それでもこの小説は単に紅葉の模倣でのみ終わっていたわけではない。もちろん内容それ自体は何ということもなく、あえて再評価を主張せねばならないほど魅力を持っているわけではないのだが、しかし、たとえば楓江が、愛する女性の死を知り「山林是れまことに遁世の処にあらず」と悟る結末はどうか。つぎに示すのは、それに続くこの小説の末文だ。

法服を焼き捨て天地総べて一大劇場と自から許して造花の真宰と為りさてこそ狂言作者に今を隠れ居るなりとぞ

世を捨て山野に隠れ住んでいても心の平安は得られない。結局「天地総べて一大劇場」なのだ。だから、「造花」すなわち自然に従い、現実に向き合って生

きていった方がよい。楓江はそれゆえに「法服」を捨て「狂言作者」になったというのだ。この数年後、「山林に自由存す」(「国民之友」一八九七年二月二十日)と詠むことになるのは国木田独歩だが、これは独歩と対照的で、安易に「山林」に逃げ込んではいけないという主張だろう。

梅花はこの小説の後半を掲げた二日後の一月六日(一八九〇年)、「靈魂」と題する散文詩²⁸でもつぎのように書き付けていた。

山に入る人山にても、悟り兼たる其とき八、いづくに行きて何かする

「悟り」が得られる特別な場所、教えなどどこにもありはしない。「靈魂」はまさにそんな内容の詩なのだが、「今八唯だ」もまたその系列で、結局楓江の遺俗という筋書きにより、宗教的とりわけ仏教的悟得を批判していたのだ。後述するように、梅花は早くから老荘思想に親しんでおり²⁹、なかでも莊子の万物斉同の哲学、すなわち、「この現実世界の対立差別のすがたをすべて虚妄としてしりぞける立場」³⁰を好んでいたらしいから、出家のごとく形式的なもの、教条主義的なものがやはり意に添わなかったのにちがいない。楓江を詩人や文学者でなくあえて「狂言作者」としたのもまた同じ考え方から発する一種の韜晦だろう。

ただ、問題はその先なので、とすれば、楓江はただ市井に「隠れ居」ればそれでよいはずなのだが、梅花はそれにもかかわらず、彼を「当世の李笠シルレル」と規定せずにはいらなかった。楓江は「苟くも狂言作者の片端に居て己の顔見知らぬを恥辱」と思わせるほどの著名人なのだ。先にこの小説には梅花の基本的なものの考え方のようなものが窺えるといったのはまさにこのことだったのだが、楓江がどこか梅花その人の面影を宿していることから推測できるように、おそらくそれもまた梅花自身の内なる思いの反映であったにちがいないのである。事実、彼は当時「鷗外に与ふ」(「志がらみ草紙」第十四号 一八九〇年十一月)という文章の中で、自らの積年の望みを「英雄の名に誇らむこと」と告白してもいた。つまり、彼は一方で、「この世はすべて虚妄だ、無だ、空だ、と世界の価値それ自体を否定しながら、いま一方では、その世界に出たい、その世界で成功したいという矛盾した思いを抱え込んでいたのだ。ある意味では虚無に促われていたともいえる楓江を、「当世の李笠シルレル」とまで言挙げしてしまうのも、それだからこそにほかならない。

そしてこの二面、まさに二律背反としかいえないこの相反する二面は、見方によっては梅花の全業績を特徴づけるものでもあった。たとえば「国事探偵 古の手柏」の奇想天外な筋立てでは後者が、「櫛もみじ」のいい加減な終わり方では前者が、たまたま前面に押し出されただけで、他の作品にも多かれ少なかれこの二面は見えて取れる。彼の魅力的な詩の韻律もやはり両者のせめぎ合いの中から生み出されたもののだが、詩についてはいまは述べない。ともかく、例の失恋事件よりほか彼が現実をいとうようになった真因はあきらかでないものの、ここでは以上を彼の思考の基本的パターンと確認しておけばそれでよい。そして「櫛もみじ」から号を「梅花道人」と改めていたのが象徴的なのだが、彼はこの時期以後ますます求道的になり、やがてその思考の矛盾に足を絡め取られてゆくことになる。

ところで、ではそのような彼は、当時文壇でどう評価されていたのか。最後に「今八唯だ」(上)と同じ一八九〇(明治二十三)年一月一日の「読売新聞」紙上を飾った逍遙の「叢譚を設けたる理由」と題する文章を掲げてこの節を閉じたい。

許多の将星ありて我社の屋背に降止まり志かもおのおの光を分つて我新聞の紙面を照せり先づ小説の欄間の上に八舶来薬研にて西鶴を細末にし拗人を殺し人を活す一種の仙丹を錬らんとする紅葉山人といふ将星あり禅字より出て和漢洋に入り和漢洋をぬけて西鶴に蔵れ西鶴の美醜を看破つて豁然大悟し更に俗人に戻らんとする幸田露伴といふ将星あり花実繁簡剛柔濃淡の八行を具足せる落花漂絮といふ将星あり

容易に推測されるように、これは主筆・高田半峰のもと、逍遙や紅葉・露伴を社員に迎えて文学色を強め、小新聞のイメージを一掃しようとしていた「読売新聞」の宣伝の一環として書かれた文章だから、内容についてはむろんかなり割り引いて理解しなくてはならないのだが、それでも梅花はこれまで眺めてきた仕事によって、一八九〇年の新年には、何と紅葉・露伴と並び称されるほど期待される作家のひとりになっていたのだ。

II b 「読売新聞」社時代(続)

江戸浮世絵師の評伝と旅

見てきたように梅花は、早くも入社二年目にして社の内外で注目を浴び始めていた。質はともかく、この半年間ほとんど休む間もなく小説や多彩な記事を供給し続けてきたその努力が認められたのだ。が、それなのに、彼はなぜか「今八唯だ」以降「遮莫天」(「国民新聞」一八九〇年九月一日〜九月十日)まで、ほぼ九ヶ月もの間小説から遠ざかることになる。そしてそれに代わって突如、英一蝶を筆頭とする江戸浮世絵師の評伝を紙上に連載し始めるのだ。はたしてその間何があったのか。この節ではまずその辺りを少し探ってみよう。

ところで、梅花が書き残したこの江戸浮世絵師の評伝については、これまでほとんど知られていなかった。あるいはそれが正確でないなら、ほとんど注目されてこなかった。たとえばこれに触れた数少ない書物の一つ『近代文学研究叢書 第三巻』(前掲)の中でも、つぎのように記されている。

その他、読売紙上に「葛飾北斎・勝川春章・宮川長春」など江戸時代の三浮世絵師の小伝を載せている。

「三浮世絵師の小伝」といわれているがそうではない。「勝川春章」も弟子の春英の誤り。人数からいえば六人。そして何より梅花が最も力を費やした英一蝶について、ただの一言も言及されていないことが、この仕事への関心度の低さを如実に示しているのだが、彼のこの試みは、従来いわれているよりいま少し大きな仕事だったのである。つぎにそれらが「読売新聞」に掲載された月日を示し、その全貌を記しておく。

一八九〇年三月 十二日	英一蝶の伝
十四日	同右 (続)
十五日	同右 (続)
十七日	同右 (続)
十九日	英一蝶伝補遺附正誤
三月二十一日	葛飾北斎の伝
三月二十四日	喜多川歌麿の伝
三月二十五日	西川祐信の伝

三月二十六日 宮川長春の伝

同 勝川春英の伝

さらに三月二十七日の「寄書」欄でも「補遺」が朗月亭主人の「葛飾北斎の伝に就て」などという文章とともに掲げられたりしているのだが、以上が梅花の評伝のほぼすべてといってよいだろう。これを見てもあきらかなように、評伝とはいっても英一蝶を除けばひとりにつきわずか一日しか割り当てられておらず、いつてみれば、多少堅い新聞記事のようなものにすぎないのだが、いかにも考証癖のあつた梅花の仕事らしく、どの伝もなかなか丁寧に書かれていたことは否めない。

一 蝶姓八藤原氏八多賀幼名を猪三郎と云通称を助之進とも又次右衛門とも称せり承応元年撰州大坂に生父は某侯の侍医にして多賀伯庵と呼べり猪三郎寛文六年拾五才の時江戸に來り其頃の丹青家なる狩野安信を師と頼み専ら北州の画を脩め名を信香又安雄など称し頗る出藍の誉ありしが後に土佐家の趣を折衷し猶ほ岩佐又兵衛菱川師宣等の筆意に倣ひしより安信の門を出で自ら一家を為し名を改めて多賀潮湖と称せり

たとえばこれは「英一蝶の伝」の書き出しだが、伝統的な評伝の文体で、いま読めば味も素つ気もないが、その分安心して読めるともいえるのではないか。出典として作中に直接名が挙げられているのは『齋庭雜録』(喜多村齋庭著 一八三二年以後成立)と『浮世絵類考』(太田南畝原撰 一八〇二年成立)³¹くらいだが、「読売新聞」の読者のひとりで評伝の誤りを正した朗月亭主人なる人物によれば、ほかに『戯作者六家撰』(岩本活東子 達磨屋 編 一八五六年成立)なども参看していたようで、梅花はそれら多数の古文獻を巧みに付き合わせ、ともかく読める小伝にまとめ挙げていたのだ。

そしてその甲斐あつてか、なかなか評判もよかつたらしく、朗月亭主人の訂正文の中にも好意的な言葉が見られる³²し、芙蓉山人と名乗る読者も当時つぎのような文章を寄せていた。

この頃貴社新聞附録寄書欄内に西京黼黻生に答ふとして梅花道人の稿せられた浮世絵師の列伝を掲げられ、さて、それを朗月亭主人が追補せられました実に其のお骨折の程後進のものに取つて八感謝に堪へません

「梅花道人にお知らせ申す」・「読売新聞」一八九〇年四月八日

しかし、それにしてもなぜ浮世絵師なのだろう。じつをいえば、右の文章がはからずも明かしているように、梅花のこれらの評伝はすべて「西京黼黻生に答ふ」という総題のもとに記されていて、もともとは「黼黻生」の問いへの答えとして書かれたもののだが、残念ながら前後の新聞を当たつても、その問い自体が見出せないため、梅花が突然これらを記さねばならなかった理由についてはよくわからないのだ。ただ、彼が三月二十七日の「寄書」(「読売新聞」欄で語っていたつぎの言葉は注目に値しよう)。

近頃八美術熱盛んになりて殊に浮世絵八一般の注意を喚起すやうになりたれど如何にせん古来の習慣により浮世絵師を賤みてか其伝記とも云ふべき八彼の写本として数人の手に成りし浮世絵類考あるのみ時に其道に遊ぶ者が西洋人に先人の歴史を尋ね問はれて口含ることある八大に耻るところなるのみか東洋の一大美術国として誇る其鼻に対しても申訳無き次第なればと偕てこそ一個人の黼黻生に答ふるものを附録中寄書の欄内に八掲げしなり

もちろん、これを読んでもなぜ浮世絵師なのかという問いへの答えが見出されるわけでは毛頭ないのだが、少なくともこれらが「西洋人に先人の歴史を尋ね」られた時、「口含ることある八」「耻」云々という幾分ナシヨナリスティックな意識のもとに書かれていることだけはあきらかだろう。すでにフェノロサや岡倉天心らによつて浮世絵をも含む日本美術全般の再評価が始まっていた時期であるから、これ自体、さほど目新しい仕事であつたわけではないだろうが、ただ新聞紙上でごく普通の読者にも理解できる読み物に仕立て上げたところには、やはり梅花のジャーナリストとしての感覚の冴えを見て取つてよいのではないか。その意味でこの評伝は、獨創性に乏しくつい時流を追いかけてしまい、作家としてはなかなか見るべき作をものしえなかつた彼が、自らの考証癖を生かして偶然にも成し遂げた「読売新聞」社時代のもつとも面白い企てであつたのかもしれない。

ところで、梅花が江戸浮世絵師の評伝を綴り始めていたころ、その背後でひとつの事件が持ち上がっていた。同時期、同じ「読売」に連載されることになる紅葉の「おぼろ舟」(一八九〇年三月二十日、四月七日)に関するトラブルである。このトラブルこそ、こののち彼を退社に追い込んで、詩の修業に向かわ

せる一つのきつかけになるものだから、つぎに本間久雄の文章³⁵を参照し、少しその概略を紹介しておこう。

本間氏によれば、事件は同年三月の半ば、半峰と文芸欄の主幹をしていた逍遙、それに梅花の三人が、紅葉の依頼を審議する会合を持ったところから始まった。紅葉の依頼とはほかでもない。彼は同月二十日から同紙に連載することになっていた「おぼる舟」の外題を、鷗外ら他の作家のものは皆四号活字で組まれていたにもかかわらず、ひとり特別に二号活字で掲載してくれるよう頼んできたのだ。しかし、結局その会合で、他の小説とのバランスなどを考慮したためだろう、三人はその要望を認めないという結論を出し、紅葉に伝えた。が、はたして梅花からそれを伝えられた紅葉は激怒した。そして、彼は早速さまざまな書簡を梅花に送りつけてきた。つぎに示すのは本間氏が紹介しているその書簡³⁶の最後の一節である。

二号活字外題解禁の命出るまでは、予は天満天神に誓ひて、物語の筆をとるまじく、雑報でもかいて責任を塞げ候へば、貴兄予に代りて大手筆をふるひたまはむこと願はしく候。それがかなはずば、十八番といふやうなれど、退社！ 退社！！

この問題については、結局、当代一の人気作家に育ちつつあった紅葉を「退社」させるわけにはいかず、逍遙の取り成しで紅葉の主張をそのまま認め、二号活字を用いることで何とか事無きをえるのだが、はたしてこのような書簡を送りつけられた梅花の心境はどつであつただろう。「貴兄予に代りて大手筆をふるひたまはむこと願はしく」などという皮肉には、すでに才能の違いは十二分に見せつけられていただろうから、おそらく怒りや当惑をとり越して、おのれ自身の腑甲斐の無さに失望すら覚えたのにちがいない³⁵。彼がこののち一時小説を断念し、詩にのめり込んでいくのもそれだからこそだろう。

むろん、彼がこの直後、逍遙と紅葉の二人と組んで、当時上野で開かれていた第三回国内勸業博覧会のレポート記事（「博覧会余所見記」³⁶）をのびのび記しているところを見ると、この事件のみで退社を思い立ったとは思われないのだが、しかし、この時梅花の内部に、少なくとも脅しに屈し、主筆をも交えた話し合いの結論を簡単に覆してしまつ「読売」への不審の念が芽生えたことだけは間違いないだろう。庇護者ともいふべき篁村もいなくなつていた³⁷社内でも

それらが積もりに積もつて彼を退社へと追いやつていくのである。

現在私たちが読むことの出来る「読売」在籍中の彼の最後の文章は、「拜啓先月廿八日信州和田にて認めし手紙 行違にて投函致さず ツイ其儘に相成り 怠慢謝罪此事に御座候」で始まる逍遙に宛てた五月十六日付のつぎのような書簡である。彼は「博覧会余所見記」を無事終えて出掛けた露伴らとの旅の模様を伝えたのち、こう記していた。

昨夜帰京仕候 即刻参社の筈に候へども 近頃高田先生に対し大に注文有之成否によりて小生も少しく考ふるところ御座候間 先づ夫れまでは出社致さざる覚悟に御座候 書余申述べ度事積んで山の如くに候へども 拝眉の期に譲る 草々頓首³⁸

半峰への「注文」がどのようなものであつたのかはわからない。「おぼる舟」事件と関係があるのかないのか、それも不明というほかにないが、その「注文」が通らなければ「出社致さざる覚悟」と、事件からおよそ二ヶ月たつて、今度は梅花が最後通牒を突き付けたのだ。が、もちろん花形記者のひとりに育つていたとはいえ彼と紅葉とはあらゆる点で扱いが異なつていた³⁶。はたしていつのことか、正確な日付まではあきらかでないのだが、おそらく五月の下旬頃、結局その「注文」が入られなかったのだろう、彼はついに退社を決意するのだ。この決意は、そして結果から見れば、詩人・中西梅花の誕生へ向けての第一歩でもあつた。

「読売新聞」退社後、彼は内田魯庵の紹介で「国民新聞」に関わる傍ら、本格的に詩の研究を始め、やがて美濃虎溪山に籠つて『新体梅花詩集』に結集される数々の名作を完成させることになるのだが、この節では、最後にその修業の場となつた旅の空間について語つておこう。

ときに根岸派などと呼ばれる人たちが、旅をこよなく愛したことはよく知られているが、篁村、四軒、南翠らとともにその一員と目されていた梅花もやはり例外ではなかつた。「今八唯だ」の楓江の旅などあきらかにその反映とみてよいが、彼もまた何かといつては旅に出た。次節で詳しく紹介する虎溪山行きもむろんその一環にほかならない。

ちなみに、現在判明している彼の最も早い旅は一八八九（明治二十二）年八月の露伴との草津行きだが、そのようすを比較的よく知りうるのは、先に見た

「読売」退社直前の、ある意味ではその引き金になったともいえる旅である。この旅は篁村、露伴の二人に、初期の児童文学界の代表的な担い手のひとりとして知られる高橋太華を加え、四人で京阪の地を目指したものであったのだが、梅花の証言のほかに露伴が「乗興記」(大阪朝日新聞「一八九〇年五月十八日(六月五日)」と題する道中記を残していたからだ。いまそれらによつてざっと彼らの足跡を辿ってみると、彼らは四月二十六日に東京を離れ、碓氷峠を越えてまず軽井沢に向かっている。そして、諏訪・塩尻とまわつて木曾谷に入り、奈良井・福島と踏破して行き、岐阜で足を痛めた篁村と別れ、三人で京都に入った。梅花はその地でさらに西に行くという露伴、太華と袂を分かち⁴⁰、しばらく京大阪を見てまわつて五月十五日に東京に戻つた。そして、この旅 およそ二十日間にも渡る大旅行 から帰つてすぐに先の逍遙宛書簡を認めただけだ。だから、この旅の間にも随分深刻な話が出たのにちがいないのだが、露伴によれば、道中は「篁村子は木隠れに鳴く老鶯に負ぬ気を出されしと見えて一ダース二ダースと洒落を吐き玉ふ、それを真似して梅花道人が口を尖らし饒舌るも可笑し。」(「乗興記」⁴¹)などというふうであつたという。さらに「乗興記」から寢覚の床での一場を書き抜いてみよう。

寢覚の旅にて日もまだ暮ぬ内より大きに飲む。肴は煎たる竹の子と骨抜かず泥鰌の鶏卵とぢ、是より外には何もなければ其代り酒は上等と云ふならまだしも、酒は甘くてピン／＼の分子多き奴なり。然りながら連中互に飲みて／＼、篁村子大いに酔ひ梅花子も大いに酔ひ太華子は半酔となり、互に言論盛んに洒落滑稽の数を尽したれば、笑声天に響きて岐蘇の山の神も呆れたるべし。

気心の知れた仲間同士の旅の楽しさが伝わってくるようで、何とも微笑ましいではないか。いかにも気楽そうで、梅花に限つていえば、とても帰京直後に辞職するほどの問題を抱えていたようには思われぬが、しかし、それだからこそ、逆に非日常的な時間と空間を存分に楽しみ味わう必要があつたのかも知れない。

「読売」を退社した後も、むしろ彼の旅は途絶えていない。それどころか、時間的制約がなくなつたためだろう、むしろより頻繁になつて行く。その報告が「国民新聞」に寄稿された「旅徒然」と題する一連の文章(一八九〇年八月

十五日、同二十三日、同二十七日)にほかならないが、それらによれば、諸々の憂さをはらすかのごとく、彼はまだ先の大旅行の余韻も覚めやらぬ八月上旬に早くも赤城登山を試みて、そのまま日光まで足を延ばしている。また、いったん東京に戻つて同月下旬、再び上州に向かい、今度は磯部に逗留していた篁村を訪ね、大酔して碓氷川に飛び込んだりしながら、さらに下仁田方面をも旅してまわり、そしてその半月後、いよいよ美濃へと向かうのだ。(未完)

注

28 この詩はのちに分かち書きにされ、かなり手を加えられて『新体梅花詩集』に収録されることになるが、初出の「読売新聞」では「韻文」という標題が付されていたものの、一般的な詩の形式を取つてはいなかった。

29 森田思軒の手になる『新体梅花詩集』の序に、道人嘗て諸子と会食し酔て莊子を快誦す音吐万揚一世を叱咤するの概あり何ぞ其壯なるや」などともある。

30 金谷治訳注『莊子 第一冊(内篇)』(岩波文庫 一九七一年十月)の「解説」による。

31 梅花自身は「葛飾北斎の伝」の中で「浮世絵追考」と記している。なお、前年の一八八九(明治二十二年)、博文館から『新增補浮世絵類考』が刊行されている。

32 たとえば「歌麿の伝に就きて質す所あり」(「読売新聞」一八九〇年三月二十八日)の中の「世の絵画を好まるゝ人々八大に満足せらるゝならん主人も至つて結構に存するなり」などという言葉が指す。

33 (注3)に同じ。

34 日付はないそうだが、この書簡への応対として出された梅花の逍遙宛書簡が残されており、その日付が三月十九日となっているから、おそらくその前日か前々日に書かれたものだと思われる。

35 梅花は「紅葉山人に与ふる梅花道人の書翰」(「国民新聞」一八九〇年八月十五日)という文章の中で、「或る令嬢」が紅葉の作を誉めるのを耳にしたときのエピソードを披露し、「羨さが込上りて御前様の面憎く死んで奥度ほどに相成り候へど熟我身考へて候へば未だ命惜く候まゝ百年許り見合せと仕り候」と彼に対する複雑な思いを打ち明けている。

36 このレポートは一八九〇(明治二十三年)四月四日の逍遙の「序」を皮切りに、四

月二十八日まで十三回に渡って連載され、梅花は「其一」(六日)と「其四」(十一日)と「其六」(十三日)を担当している。なお、紅葉は「其五」(十二日)と「其七」から「其十一」(十五、十六、十七、十九、二十日)までで、「序」をも含めた残りの五回を逍遙が受け持った。

37 響庭篁村は子安峻のあとを受けて前年(一八八九年)の一月に社長に就任した本野盛享と折り合わず、その年十一月に退社していた。

38 逍遙協会編『坪内逍遙研究資料』第一集(新樹社 一九六九年九月)収録

39 本間氏が(注3)の論文で、『半峰昔ばなし』に梅花について「ただの一ヶ所も言及しているところがない」こと等を挙げ、官僚上がりで文学に理解のない社長の本野盛享ばかりでなく、間に立つべき半峰まで「一見粗暴放逸」な梅花には共感を持ちえなかったのではないかと推測しているが、そんなこともあったのかも知れない。

40 この辺りのいきさつは、露伴のその後の旅のよつすを綴った「まき筆日記」(『枕頭山水』博文館 一八九三年九月 収録)に詳しい。

41 「乗輿記」の引用はすべて『露伴全集 第十四巻』(岩波書店 一九五一年六月)に拠った。

(続)

(平成十五年九月三十日受理)

* The Dawn of < Bungaku Seinen > Critical Biography of Nakanishi Baika (III) / Yoshiki OOIDA (Department of Japanese Language and Literature) (Received September 30, 2003)